

## 佐喜眞興英の中学時代と作品 2 題

Life of Koei Sakima in his Middle School Days  
— With Two of his Short Essays —

稲 福 日出夫

民俗学においても、また法思想史、法史学上も興味の尽きない著作『女人政治考』(1926年)を遺した佐喜眞興英は、1893(明治26)年11月24日、宜野湾間切新城村で、父佐喜眞亀、母カマの長男として出生する。「3歳の頃」佐喜眞本家の養子となる。養父佐喜眞加那、養母カマ(実母と同名)。佐喜眞は、1900(明治33)年4月、地元の中頭郡宜野湾尋常小学校に入学した。当時の学制は、尋常科4年・高等科4年の四・四制であった。ただし、高等科2学年の課程を修了すると、中等学校への受験資格が与えられた。1908(明治41)年3月、佐喜眞は中頭郡宜野湾尋常高等小学校を卒業した。その卒業式の様子を「琉球新報」は次のように伝えている<sup>1)</sup>。

「〔琉球新報：明治41年3月25日〕中頭郡宜野湾尋常高等小学校の証書授与式は去る二十二日午前第十時より執行したり。来賓には中頭郡各村組合立農学校河田教頭を始め隣校校長及職員村役場吏員各字有志者等数十名にて予定の時刻来るや生徒は各受持教員に引率せられて式場に整列し参列員及来賓は校長の案内にて着席一同敬礼の後宮原校長は正面に進み挙式の旨を告げ茲に式の幕は開かれたり。それより君が代の唱歌二回勅語奉読尋常科卒業生総代高等科卒業生総代尋常科修業生総代高等科修業生総代にそれぞれ証書を又尋常科第一学年より順次高等科第四学年に至る優

---

1) 『宜野湾市史 第二巻資料編一』(1980年)、247頁。

等生総代に賞品を授与し次ぎに職員総代の学事報告校長論告卒業生の答辞卒業式の唱歌と順を追ふて挙行之来り。それより校長は式の終りを告げ引続き余興を行ふべき旨を述べ左の順序によりて執行せられたり。一、高等児童の唱歌、二、児童談話、三、尋常科第一学年の遊戯、四、尋常科第二学年の遊戯、五、高等科児童男の体操、六、尋常科第三学年の遊戯、七、尋常科第四学年遊戯（男女別）、八、高等科男生の作法演習、九、高等科女の遊戯、十、高等科男の唐手、十一、全校児童の綱引（男女の別）終りて宴会に移れり。現今民間にては農事多忙の時なるにも係らず一般参観者数百宴会加入者五十四名あり頗る盛況なりき。（宜野湾通信）」

ここで、『宜野湾市史』と『宜野湾小学校創立百周年記念誌』に依拠しながら、宜野湾尋常高等小学校の沿革を押さえておく。1881（明治14）年5月1日、普天間神宮寺内に「中頭小学校」が設立された<sup>2)</sup>。生徒は、中頭郡の11間切の文子（間切番所の事務見習い）のなかから、2～3名づつ選抜して入学させた。その合計生徒数は21名であった、という。中頭小学校の設立後、1年を経ぬ間に、中頭郡の各間切に小学校が誕生した。小学校の普及にともなって、中頭小学校は翌1882（明治15）年3月に廃校となり、その年の4月には新たに「宜野湾小学校」が創立された。1886（明治19）年の「小学校令」、それを受けた1888（明治21）年1月の「県令4号」によって、1888年5月、宜野湾間切普天間村に「中頭高等小学校」が設立され、それに伴い宜野湾小学校は「宜野湾尋常小学校」と改称された。1902（明治35）年、各間切の尋常小学校に高等科が併置されることになり、中頭高等小学校が同年3月に廃校、4月には宜野湾尋常小学校が「宜野湾尋常高等小学校」と改称された。以後、1941（昭和16）年に「宜野湾国民学校」と改称されるまで、その校名が続くことになる。これが現在の「宜野湾小学校」の前身である。なお、1903（明治36）年4月、宜野湾尋常小学校の普天間分校が設立され、1906（明治39）年4月には「普天間尋常小学校」として独立した。校区は、新城、野嵩、普天間、喜友名、伊佐、安仁屋の6村であった。1923

---

2) 『宜野湾市史 第一巻通史編』（1994年）の291頁には「(18) 82年4月、普天間神宮寺を借りて『中頭小学校』の門札をかがげ開校した」と記されているが、同書の年表（569頁）では、1881（明治14）年5月の欄に「中頭小学校、普天間神宮寺内に設立」となっている。また、『宜野湾小学校創立百周年記念誌』（1983年）でも、「中頭郡に最初に小学校が設立されたのは、1881（明治14）年5月1日のことで、校舎は宜野湾間切普天間村神宮寺を借りうけ、校名は中頭小学校と称した」（同記念誌、82頁）とある。

（大正12）年4月、そこにも高等科が併置され、「普天間尋常高等小学校」と改称された。

佐喜眞興英が宜野湾尋常小学校に入学したのは1900（明治33）年4月なので、彼の3年生の時に高等科がそこに併置されたことになる。彼の4年次には普天間分校が設立されていたが、彼は分校へは通わず、そのまま宜野湾尋常小学校に通い続け、そこを終了し、高等科に進んだことになる。当時は高等科も4ヶ年課程で、結局、佐喜眞は1908（明治41）年3月に、宜野湾尋常高等小学校を卒業した。なお、彼の卒業の年から尋常科は6ヶ年課程となる。

ちなみに、『宜野湾小学校創立百周年記念誌』には、「当時の思い出」と題して、佐喜眞興英の従兄にあたる新城加那からの聞き取りが掲載されている<sup>3)</sup>。新城は1988（明治21）年生まれなので、佐喜眞より5歳年長ということになる。彼は1895（明治28）年に宜野湾尋常小学校に入学したが、病を患い、同級生より1年遅れて1900（明治33）年にそこを終了し、同年、中頭高等小学校に入学した。しかし、彼が在学中に中頭高等小学校が廃校、尋常小学校に高等科が併置されることになったので、宜野湾尋常高等小学校に編入している。

## 二

佐喜眞興英が県立中学校に入学した1908（明治41）年は、佐喜眞の生まれる前年の1892（明治25）年7月以来、約16年の長きにわたって沖縄県知事に在任し、権勢を誇った奈良原繁がその職を辞し、4月6日、奈良原の推薦によって日比重明が県知事に就任した年であった。そしてまた、謝花昇が死去したのも、佐喜眞が入学したその年の10月である。

当時の中学受験の光景を、佐喜眞と同期に卒業した島袋光裕が記している。

「当時は中学校といえば県下に一校しかなかった。もちろん、中学に進学するというのが珍しく、受験の日には親類縁者が弁当持ちで沢山運動場に集まり、私たちの試験がすむまでゴザを敷いて弁当を開きながら待っていた。何とも悠長な話である

---

3）前掲、『宜野湾小学校創立百周年記念誌』、208, 209頁。

が、集まった人たちにとって、試験の成否より集まっておしゃべりをするのに興味をもっていたのではないか<sup>4)</sup>。

おおらかな性格だったと思われる島袋らしい描写である。彼のような都会人、ナーファンチュと違って、宜野湾間切新城村から出てきて受験しようという佐喜眞にとっては、一生一世の決心でもって臨んだに違いない。彼の幼少のころを記した断片を読むと、元々が病弱で、且つ生真面目、負けず嫌いといった性格が伝わってくる<sup>5)</sup>。興英の教育に熱心であった養父佐喜眞加那を先頭に、養母カマや実の親、また親類縁者も、安国寺側に正門があったという当時の県立中学校へ、受験生興英とともに人力車を走らせたのであろうか。あるいは、既に聞かされていたのであれば、許嫁のウタさんも一緒であったのか。それとも、この15歳の娘は新城村でひとり、興英の試験の出来具合を案じて胸を痛めていたのであろうか。

ここで佐喜眞興英が入学する以前の県立中学校の沿革を『養秀百年』(1980年)に依拠しながら辿り、また、彼の在学中の様子を探ってみたい<sup>6)</sup>。

1879(明治12)年3月、沖縄に廃藩置県が断行された。それによって、これまでの「国学」は県庁の所管となったが、制度・教則などはすべて従前通りであった。廃校となった「国学」の残留学生ら240名は、引き続き旧態依然の漢学教育を受けていた、という。翌1880(明治13)年12月9日、教則課程等が認可され、首里当蔵龍潭東岸の国学跡に「首里中学校」が創設された。初代校長は、首里役所長の職にあった滝脇信敏が兼務している。規定では「学級数六、修業年限三年、入学者資格小学校卒業生」となっていた。が、当時は未だ小学校卒業生がいなかったため、旧来の生徒240名に対して歴史と作文の試験を課して、38名を選抜して入学させた。1881

---

4) 島袋光裕『石扇回想録』(沖縄タイムス社、1982年)、25頁。

5) 『女人政治考・霊の島々(佐喜眞興英全集)』(新泉社、1982年)に収録されている佐喜眞道夫編「年譜」に記されている「ウタの話」や、仲村元惟「佐喜眞興英の肖像—沖縄研究の先覚者—」(上掲『宜野湾小学校創立百周年記念誌』所収、231-235頁)から、尋常高等小学校時代の佐喜眞の性格のある一面が浮かび上がってくる。仲村の論稿は、興英に縁の人々から直接、聞き取り調査を行ったものを記録しており、おおいに参考になる。なお、仲村の論稿は、同一表題で内容もほとんど同じものが『佐喜眞興英—生誕百年記念事業報告書—』(宜野湾市教育委員会、1994年)、『新城郷友会誌』(2000年)に転載されている。

6) 阿波根朝松「明治期—中沿革史」『養秀百年』(養秀同窓会、1980年)所収、また『養秀百年』に収録されている「学校のあゆみ年表」を主に参照した。

（明治14）年1月に開校して授業を始める。1882（明治15）年3月には首里三小学校の生徒20名を選抜して入学させた。1885（明治18）年12月、体操科を実施し、また教科目に英語を加え、教育課程の改善が図られる。1886（明治19）年12月、校名を「沖縄尋常中学校」に改める。翌1887（明治20）年3月、校名をさらに「沖縄県尋常中学校」とし、また、修業年限を「5年」に改めた。1891（明治24）年に、校舎をこれまでの国学跡から、首里区字真和志の旧中城御殿跡（現在の首里高校の敷地）に新築移転した。1894（明治27）年4月、中学教則を改正し、英語科を随意科とした。これが翌年のストライキの遠因となる。同年5月、初めての修学旅行が実施される（京阪地方）。さらに、『養秀百年』に掲載されている「学校のあゆみ年表」によれば、同年8月、「学友会が組織され、雑誌を発行する」となっている（同書、569頁）。しかし、『創立百十周年記念出版写真集 目で見える養秀百十年』（1990年）のキャプションには「県立第一中学校の学友会誌は1892年（明治25）『球陽』の名で創刊。1914年『学友会雑誌』、1917年（大正6）に『養秀』に改題、第35号まで出している」と記されている<sup>7)</sup>。『写真集』のほうが『養秀百年』より10年後に出されている。また、『写真集』には2葉の「球陽」表紙が載っている。それは、「第二十号」（1911年）と「第拾六号」（明治四拾年九月五日発行）の表紙である。この学友会誌「球陽」が創刊以来、毎年発行されていたと仮定すると、創刊の年は、『写真集』に記載されているように、1892年（明治25）ということになる。1896（明治29）年4月、入学者が106名となり、はじめて一学年を2学級編成とする。翌1897（明治30）年4月には入学者が149名で、一学年が3学級編成となった（佐喜眞の中学時代も3学級編成である）。1899（明治32）年3月、5年生が東京へ修学旅行、以後、例年行事となる。同年4月、校名を「沖縄県中学校」と改称する。さらに翌1901（明治34）年5月、「沖縄県立中学校」と改称された。1908（明治41）年4月、佐喜眞興英入学。1910（明治43）年4月、首里城内の旧建物を利用して分校が設置される。同年8月、沖縄県立図書館が設立され、伊波普猷が初代館長に就く。1911（明治44）年4月、分校が独立して「沖縄県立第二中学校」となる。それに伴い、沖縄県立中学

7) なお、この写真集には頁が付されてなく引用紹介するのに少々不便を感じる。が、後に触れる県立中学校、一中の「学友会誌」の表紙も4葉掲載されており、イメージが膨らんでくる貴重な写真集である。

校は「沖縄県立第一中学校」と改称される。同年6月、大久保校長依願免職。長野県立上田中学校教諭山口沢之助が校長に就く。同年10月、沖縄読書会設立される(清水駿太郎、当間重慎、伊波普猷ら発起人)。1912(明治45)年4月、県立第二中学校が首里城内の仮校舎から嘉手納に移転。1913(大正2)年3月20日、佐喜眞興英、沖縄県立第一中学校を卒業。

佐喜眞の中学入学の頃は、5年制になってだいぶ経っており、また3クラス編成であった。佐喜眞の4期後輩にあたる長嶺朝昂(明治45年4月入学)の回想記によれば、「入学すると、身長順に甲、乙、丙の三組に編成され」た、という。そして「中学生になれば身体の発育が個人によって差があるので、学年が進むにつれて身長順に入れ替わった」と語っている<sup>8)</sup>。

佐喜眞に関する論稿でしばしば引き合いに出される沖縄県立中学校の同期生たちの生年月日を、ここであらかじめ記しておく。島袋光裕は、佐喜眞と同じ年の1893(明治26)年6月1日生まれ。下地玄信は1894(明治27)年6月30日生まれ。当間重剛は1895(明治28)年3月25日の生まれ、である<sup>9)</sup>。島袋は自叙伝『石扇回想録』の何力所かで、1907(明治40)年に沖縄県立中学校に入学した、と書いている。もし、そうであれば、佐喜眞を含めて他の三人より1年早く入学していることになる。というのも、佐喜眞、下地、当間ともに1908(明治41)年の入学である。当時の入学者名簿を私は見てないが、『養秀同窓会会員名簿』では、年度毎の名簿が記載されており、四人共、「県立一中 第25期 大正2年度」となっている。つまり、彼等は大正2年3月に卒業して、その大正2年度から同窓会会員になった、ということであろう<sup>10)</sup>。

県立一中・首里高校の養秀同窓会の出版物には、多士多才な人々の回想記が掲載されていて、当時の中学校の雰囲気を知るうえで貴重な証言集にもなっている。佐喜眞の4期後輩にあたる宮里栄輝は、明治45年4月に一中に入学した。彼は回想記のなかで「入学式を終わっての帰途、父に伴われて学校近くにある父の知り合いの

---

8) 長嶺朝昂「想い出」前掲『養秀百年』所収、298頁。

9) 仲宗根將二「下地玄信」『平良市史 第8巻資料編6』(1988年)所収、282-284頁。当間重剛『当間重剛回想録』(1969年)、20頁、30頁。

10) 『創立100周年記念 養秀同窓会会員名簿』(1980年)、37、38頁。

11) 宮里栄輝「追憶断片」前掲『養秀百年』所収、296頁。

家を訪ねた。その時、そこに下宿していた佐喜眞興英という人の話を聞かされた。彼は一中の5年に進級した優等生で、宜野湾村出身ということだった」と記している<sup>11)</sup>。

### 三

養秀同窓会が母校の九十周年記念誌を作成するために座談会を開いた。その様子を源武雄が記録している。「Y 私は大正二年卒だが、私の在学時代に『仰げば高し 弁ヶ岳』の校歌が出来た。唐手は花城長茂先生も体操同様教えていたが、明治四二年には唐手の武道教師として糸洲安恒という先生が見えた。われわれの時代に、それまで唐手となっていたのを唐を空に改めて空手と書くようになった。空手の歴史に記録すべきことである」<sup>12)</sup>。空手の件はしばらく措くとして、校歌の話は興味深い。というのも、イニシャルYが誰であるのか確定できないが、大正2年卒と述べているので、彼は佐喜眞と同期生である。

同じく源武雄が、先の同窓会誌の10年後に発行された『養秀百年』のなかで、克明に校歌の由来を描写している<sup>13)</sup>。それによれば、「山口泰平日記」によって校歌作成のいきさつが判明した、という<sup>14)</sup>。

山口泰平は、1907（明治40）年4月に赴任した国語漢文の教師で、1911（明治44）年6月に広島県師範学校に転任するまでの約4ヶ年余り、県立中学校・一中で教鞭をとった。つまり、佐喜眞の入学する1年前に赴任し、3年生の6月に転任したことになる。後でも触れるが、この「山口泰平日記」は、佐喜眞の中学生活の前半を知ろううえでも貴重な情報を提供している。

「山口泰平日記」の明治四十二年九月三十日木曜日の欄には、「十二月九日、中学創立当日といふことが初めて決定されて、本年第一回の記念会を催すとて、絵葉書、沿革史、校歌等を作ることとし、校歌は我国語部に委任された。余等には是こそ重任である。本年の運動会は修学旅行としてはとの説が和田君の口から出たけれども

---

12) 源武雄「自由主義の息吹き（大正期）」養秀同窓会編『県立一中・首里高校90年のあゆみ 沖縄の教育風土記』（養秀同窓会、1971年）所収、158,159頁参照。

13) 源武雄「大正期 ロマン溢る大正時代」前掲『養秀百年』所収、56頁以下参照。

14) 「山口泰平日記」は前掲『養秀百年』233-264頁に掲載されている。

消滅」<sup>15)</sup>と記されている。さらにその半月後、校歌作成にあたって「国語部に清水、牧田を加へて委員とした」。つまり、当時の大久保校長が、沖縄県立中学校の校歌を、1909（明治42）年12月9日の学校創立記念日に間に合うよう作成せよ、と教員に依頼したのであった。

明治四十二年十二月九日木曜日の欄には、こう綴られている。

「本日は我沖縄県立中学の創立記念日である。実は真の記念日は従来判然して居なかったが、現校長は先年より委員を設けて其の創立日を調査せしめ、本年に至り確に明治十三年の十二月九日が本校の創立日であることを明らかにした。本日の準備は先月からであった。（略）本日は午前九時開式、君が代合唱、勅語奉読、式辞、来賓高嶺氏及職員玉城瑩君の懐旧談、生徒の答辞、校歌合唱、終って柔剣道仕合、式は簡単であったが頗る興味あり。感動あるものであった。殊にも高嶺氏と玉城氏との旧懐談とは大に生徒を喜ばしめた。最後の校歌は随分批難もあるやうであるが、生徒の合唱は意外と能く出来た。今日の第一番の出来であったとは均しく職員に口にするところであった」<sup>16)</sup>。

しかし、たとえば『養秀百年』に収録されている年表などで、この日に「本校創立二十二周年記念式を行う」と書かれているが<sup>17)</sup>、もし、「明治十三年の十二月九日が本校の創立日である」とすれば、創立22周年記念にはならないのではなかろうか。

それはともかくとして、その前年に新築された講堂で、全校生徒に混じって中学2年生の佐喜眞もまた、「仰げば高し弁ヶ岳」の歌い初めをしたことになる。

---

15) 同書、252頁。

16) 同書、253, 254頁。

17) 同書、576頁。前掲『創立百十周年記念出版写真集 目で見える養秀百十年』の年表ではこうなっている。「1909年 明治42年12月9日：本校創立22周年記念式が挙行された。本校創立日が創立調査委員会の調査によって明治13年12月9日であることが確定された。校歌が制定され、記念式で初めて歌われた」。



## 四

先に紹介した大久保周八校長は、1902（明治35）年に赴任し、1911（明治44）年6月退職した。退職した時期は、校名が沖縄県立第一中学校に改められて2ヶ月後で、佐喜眞の4年生の頃ということになる。大久保校長は、佐喜眞の1期後輩にあたる宮良長詳の回想によれば「入学当初の一年のほやほや組の我等に一々指名して教育勅語を一人一人暗誦せしめられて新入生一同を驚嘆せしめ」た、という<sup>18)</sup>。佐喜眞もまた、入学早々の頃、そのような場面に出くわすことになったのであろうか。大久保に代わって、長野県立上田中学校から山口沢之助が新校長として赴任した。山口校長にまつわるエピソードも、教え子たちの回想記に様々に出てくるが、先ず、その人物像を阿波根朝松に依って紹介する。

「山口沢之助 慶応元年四月、和歌山県雑賀屋町に生まれ、明治二十六年、東京高師博物科を卒業し、直ちに愛媛県師範学校教諭となった。三十五年、長野県立上田中学校教頭に昇任し、同四十四年、沖縄県立第一中学校長となった。挙措は謹厳で、性格は温厚、文字どおり君子人の風格を持っていた。絶えず金縁眼鏡の奥に微笑を湛え、その風貌は慈父の姿であった。教育上也家庭訪問を奨励した。一家を引っ越して首里大中町に居を構え、二男一女も沖縄県立の学校を卒業し、十二年間もこの地に勤続した。学問教養も博学で、しかも達筆、大正時代の応援旗「震天動地」は山口校長の撰文揮毫によるものである。ただ一つ、在任中標準語奨励に走ったあまり、部下教職員たちの強い主張に負け「方言札」の罰則制度を設けたことは千慮の一失であったと思われる」<sup>19)</sup>。

こうした人物像は、他の教え子の回想からも窺うことができる。「山口沢之助校長は長野県から赴任され、歌道書道にも造詣の深い学者肌の紳士であった。修身は、たいてい校長が受持つが、与那覇政敷先生が受け持たれて、山口校長は生理学を担当された」という。ところで、その生理学の授業であるが、佐喜眞の5期後輩の石川正道が、同じ回

18) 宮良長詳「恩師素描」『養秀 創立八十周年記念』（1961年）所収、122頁。

19) 阿波根朝松「明治期 一中沿革史」前掲『養秀百年』所収、45頁。

20) 石川正道「教育直語」前掲『養秀百年』所収、302頁参照。

21) 宮良長詳「恩師素描」前掲『養秀 創立八十周年記念』所収、122頁。

想記のなかで次のように語っている。「南方熊楠は、山口校長と同郷和歌山県の大先輩。山口校長が折に触れて話された熊楠の逸話は一冊の本にも纏め得るほど、僕はあざやかに覚えている。山口校長の講義は、僕にとっては生理学でなく、熊楠学であったと、今でも有難く思っている。脱線学の妙味ここにあり」<sup>20)</sup>。また、宮良は「山口校長先生は大正元年九月十三日生徒一同を集めて乃木將軍夫妻の御殉死に就て声涙並び下る訓辞をされたのが一番印象的である」と述べる<sup>21)</sup>。佐喜眞、中学5年の秋である。

宮里栄輝の回想記に出てくる「佐喜眞氏が一高の難関を突破したという朗報に接し、悦びを全校生徒に披瀝した」のも、この山口校長である<sup>22)</sup>。彼は、1923（大正12）年まで一中に在職している。

佐喜眞の中学時代の「教師の群像」は、阿波根朝松や源武雄の叙述を通じて窺うことができる<sup>23)</sup>。

明治36年頃から42年頃まで沖縄県立中学校の国語、漢文の教師として赴任していた野間清治は、国定忠治と同じ群馬県の生まれで、講談や浪花節などを愛好した。里見八犬伝の話も得意で、当時県立中学校の生徒であった徳田球一（佐喜眞の2期先輩にあたる）との思想的確執も学内であったともいわれている<sup>24)</sup>。佐喜眞と同期に卒業した島袋光裕が述懐している。「後に『大日本雄弁会講談社』（現在の講談社）の社長になった野間清治氏は国語、漢文の担任教師であった。鼻の下にチョビひげをつけ、ワイシャツもネクタイもつけず、肌着にすぐ上衣をひっかけて教壇に立つほど、この人は蛮カラ風であったから、式典や祝祭日にフロックコートなどを着てくると、生徒たちが手をたたいてひやかしたものである。野間氏は、肝心の国語、漢文より、宮本武蔵、真田幸村などの講談を聞かせるのが性に合っているようであった。話そのものがすごくドラマチックで、国語の点が悪い人でも講談になると耳を傾けた。野間氏は、出版会社をもってから、豆本といわれる講談ものを数多くだしているが、やはりそういうものが好きだったのだろうか」<sup>25)</sup>。おそらく、島袋

---

22) 宮里栄輝「追憶断片」前掲『養秀百年』所収、297頁。

23) 阿波根朝松「明治期 一中創立沿革史」前掲『養秀百年』所収、11頁以下、源武雄「大正期 ロマン溢る大正時代」同書、49頁以下参照。

24) 阿波根朝松「明治期 一中創立沿革史」前掲『養秀百年』所収、31頁参照。

25) 島袋光裕、前掲『石扇回想録』、25、26頁。

光裕とは肌が合っていたと思われるが、佐喜眞は果たしてどのように感じていたであろうか。いずれにせよ、野間は佐喜眞の1年生、2年生の頃の国語、漢文の恩師であった。

佐喜眞の在学の頃の級友による回想記で登場する当時の名物教師たちのなかで、やはり、清水駿太郎について触れないわけにはいかない。清水は、教え子たちの答案に、実に丁寧にコメントを加えて返していたようで、彼等に人間的にも深い影響を与えたようである<sup>26)</sup>。「清水先生の東洋史の講義は、三年に進級する生徒の憧憬的であったが、大学の史学科の講義にも勝る細心精緻の名講義であった」と、先の石川正道は述懐している<sup>27)</sup>。また、宮良も、「清水先生の地理と歴史との関係論は興味深かった。古代を円錐形の頂点と考えよ。そしたら底面積の部分は現代世界である。それで現代世界である底面積を研究するのが地理学であり、そして円錐形の高さの線を或る一定の高さに於て区切ってその時代その時代を研究するのが歴史学である。それで地理と歴史とは密接な関係があるのである。つまり神代時代から現代まで発達せる社会を国家を世界を一つの円錐形と見做した場合、現代世界を平面的に研究するのが地理学であり、立体的に研究するのが歴史学であると教えられて、実に面白い説明の仕方だと思った」と振り返る<sup>28)</sup>。

清水駿太郎が佐喜眞に与えた影響についても、これまで、しばしば語られてきた<sup>29)</sup>。実際また、下地玄信も「彼（佐喜眞）は在学中から歴史が好きで担当教師清水先生から大変可愛いがられ」ていた、と述べている<sup>30)</sup>。

清水駿太郎については、阿波根朝松が彼の略歴を紹介している。

「清水駿太郎 明治十四年七月、福岡市警固町に生まれ、父は旧黒田藩士で、氏の少年時は九州度量衡株式会社社長であった。県立中学修猷館に学び、三十四年、七

26) そのなかの幾つかの回想については、拙稿「『郷土愛について』：二人の生涯の覚え書——ヤーコプ・グリムと佐喜眞興英——」（『沖縄法政研究』創刊号，1999年），201頁以下で紹介した。

27) 石川正道「教育直語」前掲『養秀百年』所収，302頁参照。

28) 宮良長詳「恩師素描」前掲『養秀 創立八十周年記念』所収，122頁。

29) たとえば、我部政男「夭折と苦悶の人・佐喜眞興英——その状況と課題」前掲『女人政治考・霊の島々（佐喜眞興英全集）』「解説」所収，505頁。

30) 下地玄信「佐喜眞興英君の思い出」前掲『養秀 創立八十周年記念』所収，115頁。

31) 阿波根朝松「明治期 一中沿革史」前掲『養秀百年』所収，43頁。

高造士館に入り、大学予科第一部文科に三年修学、さらに東京帝大文科に進み、同四十二年卒業した。一年間、太宰府管内誌その他の書籍編集にたずさわり、翌四十二年九月、沖縄県立中学校教諭となり、西洋史と東洋史を教えた。大正二年、教頭に進んだ。間適樓主人の雅号を持ち、趣味は豊かで、詩歌、書画、刀剣、囲碁、弓術、柔道（初段）、園芸などに広くわたっていた<sup>31)</sup>。後にも触れる佐喜眞と下地玄信とのライバル関係は、単に試験の席次争いだけではなく、盤面上でも繰り広げられたようである。下地が後年、当時を振り返って語っている。「碁の腕くらべでは中学時代には大体同じペースで上達してまず互角だった。そしてそのころの碁の競争が実って、いまでは日本棋院の五段の免状を持つほどになった」。彼等が囲碁を覚えたのも、あるいは清水の影響であろうか。

ところで、先に紹介した「山口泰平日記」の明治42年9月6日（月）の欄には、こう記されている。「清水文学士来任す。校長那覇に迎へて、学校にて職員に引合せたり」<sup>32)</sup>。もちろん、その時の校長は大久保である。佐喜眞の中学2年次にあたる。また、明治43年3月26日（土）晴れの「日記」には、山口の人柄を窺うことができそうな興味深い記述がみられる。

「四年以下の修業書授与式を講堂に開く。特待生、四年、野崎、三年、湊川、具志堅、二年呉屋、下地、城間、一年 福島。これを見るに、優等生は何れも体格劣等也。他日社会に立って大に活躍するのは恐らく此等優等生でなくて、第二、第三流の身体強壮なる運動家であらう」<sup>33)</sup>。

特待生になると授業料免除という特典が与えられる。しかし、その特待生になるには、全学科の平均が90点以上で、且つ70点以下の学科がひとつもない、ということが条件であった。この日記をみると、佐喜眞の二年生の時の特待生は、呉屋良幸、下地玄信、城間朝儀であったことがわかる。ここで同級生呉屋良幸の回想記が想起される。彼は自らのことを「私自身善良で真面目な生徒でした。成績は優秀、品行は方正、所謂模範生でした。五カ年間無遅刻無欠席でした。卒業まで特待生で

---

32) 前掲『養秀百年』、251頁。

33) 同書、255頁。

34) 呉屋良幸「良きライバル」前掲『養秀 創立八十周年記念』所収、116,117頁。

通し又級長をつとめた」と書いている。さらにまた、「特に私を刺激し、私をして張合いある生活をなさしめたのは、実に同級のライバル——下地玄信君と河野国広君と佐喜眞興英君の三君であった。中でも下地君が好敵手であった。佐喜眞君は二学年までは目立たない生徒でしたが三学年になって突然頭角を現わし遂に卒業の時は最優秀の一番となった」と記していた<sup>34)</sup>。

もちろん佐喜眞も宜野湾尋常高等小学校では優秀であった。が、県下の尋常高等小学校の、こうした秀才組が受験し、選りすぐられて入学を果たすのである。一中卒業時の「在学中平均点九八点以上でとおして、今でも語り草となっている佐喜眞興英」<sup>35)</sup> 像を、入学当初から一貫して変わらない佐喜眞の実像として描くのも、おかしい話であるように思われる。それに、そもそも佐喜眞にとって、とくに授業料免除の特典を得なければならないといった経済的配慮をする必要などなかったわけである。ちなみに、当時、「薄資秀才の登竜門」として、広島高等師範学校や、上海にあった東亜同文書院への進学があったが、佐喜眞の同期では、呉屋が広島高師、下地が東亜同文書院に県の選抜生として入学している。

しかし、佐喜眞の中学2年生の9月に、大学を出て1年目の清水駿太郎が地理、歴史の教師として県立中学校に赴任してきた。その出会いによって、佐喜眞のなかに、中学入学当初とは違ったものが、生まれてきたように思われる。つまり、佐喜眞にまつわる様々なエピソードは、県立中学入学の当初から、というわけでは決してなく、2年生の後半になって、清水先生との出会いによって生まれたのではないだろうか。それを境に、佐喜眞は、恩師清水の期待に添うべく、がむしゃらに勉学に打ち込んでいった。後輩たちの回想記で様に驚嘆の思いで綴られているのも、結局、2年次後半以降の佐喜眞先輩の勉強ぶりを、彼等は、入学当初から目の当たりにすることになった。後輩達のその驚嘆の思いを綴った、ということであろうか。

恩師清水駿太郎が佐喜眞興英に与えた影響については、しばしば語られている。が、その生涯にわたる思想的学問的影響が、如何に決定的であったのか、を言いたいのである。

---

35) 当間重剛、前掲『当間重剛回想録』、31頁。

## 五

当時の中学生の学業面を覗いてみよう。

佐喜眞の同期である呉屋良幸はこう語っている。「成績は父兄と本人に通信簿によって通知する。学年末の成績は全校に公表して席次を示す。及第判定は厳重。各教室には名札を成績順に並べて掲げる。教室では席次順に机を並べた。専ら成績の良非によって選定される特待生制度も授業料免除も、生徒の学力増進の一工夫であったように思う」<sup>36)</sup>。

佐喜眞の2期後輩にあたる比嘉徳太郎の回想録には次のような記述がある。

「進学については学校として特別に組織的な指導はなく、また、その向きの塾もなかった。従って、授業時に入試問題を学習させる学科に対しては生徒は特に懸命になって全力を傾倒した。希望校の選定には学友会誌の学校案内が唯一の手がかりであった。また、生徒募集広告が渡り廊下の壁に貼り出されて生徒の注目の的となった。一番印象深いのは広島高等師範学校（今の広島大学の前身）と東亜同文書院（当時在上海）の両校で、各一人ずつを県が選抜し、そのうえに公費支給の特典付きで、それこそ薄資秀才の登竜門であった」という<sup>37)</sup>。

下地玄信と佐喜眞との間の「三つの賭け」は、ある種伝説的な語り草となって今に伝わっており、しばしば紹介されている。宜野湾生まれの佐喜眞と宮古生まれの下地が、共に競い合って、那覇や首里の人間に負けないよう頑張ろう、ということである。下地が次のように報告している。

「(二人は)共に首里で下宿していて学校以外でも御互に下宿を往来した。いつとなく三つの賭をした。一は卒業の成績を争う事、二は碁を争う事、三は二人は学校内では英語以外の言葉で話さない事。一は彼は一番で学校創立以来の抜群の成績とかで惜敗。二は恒に雁行していたが彼が早死にして勝敗なし。僕は其時の猛競争が

---

36) 呉屋良幸「私の黄金時代」前掲『養秀百年』所収、278、279頁。

37) 比嘉徳太郎「回想録」同書、289頁。

38) 下地玄信「佐喜眞興英君の思い出」前掲『養秀 創立八十周年記念』所収、115頁。また、下地「一中時代」前掲『養秀百年』所収、282頁参照。

報われてか現在日本棋院の五段。三は違反者は若干の罰金を出す事になっていたが僕が大概奢り役。但し其頃の英語競争が後日役に立って先年勇を鼓して英国其他の欧州行を決意した重大な原因となった」<sup>38)</sup>。

但し、佐喜眞と下地のその後の人生への処し方をみると、物の捉え方の根本のところ、二人の間には何か違いがあるようにも感じるのだがどうだろうか。

では、当時の中学生生活のスポーツの方面はどうであっただろうか。

大正11年卒業の源武雄が回想している。「一中の運動会は花々しく、また剛健なものであった。見物の父兄が黒山のように集った。当時県下きっての呼び物行事であった。その中でも特に中学校の運動会らしかったのは、五年生の銃を持つての部隊教練、唐手の演武、大車輪宙がえりの鉄棒、四年対五年の棒倒しなどが思い出として残っている」<sup>39)</sup>。

また、この一中の運動会と並んで、当時、安里大道にあった一高女の運動会も県下の呼び物行事のひとつであった、といわれている。しかし、あろうことか、「男子中等学生には入場をゆるさなかった」という。続けて、源武雄は次のように綴っている。「一高女の校舎は大通りから長い相思樹の並木を通りぬけて行くようになっていたが、運動会の日には正門に中学生のまぎれこむのを摘発する先生が立っているので、こわくて入れず、遠くの方から相思樹の奥から聞えて来る花やかな光景を想像し、うらめしそうに徘徊しているだけであった」<sup>40)</sup>。しかし、中学生である。必ずや、ヌギバイした生徒が何名かいたに違いない。佐喜眞がどうであったかは見当がつかない。あるいは、島袋光裕に誘われて、彼と一緒に大道あたりを徘徊したのか。それとも、それを断り、あるいは一高女の運動会があることなど眼中になく、一人下宿で、郷里の新城村で採集した説話を整理していたのであろうか。

佐喜眞と同期の呉屋は、こう回想している。「年一度の秋の運動会が目につかぶ。一中の運動会は大変有名で、父兄はもちろん、首里中の人が見物に集まった。当日の花形は四、五年生の連合で行われる兵式教練であった。私も一度、中隊長として

39) 源武雄「自由主義の息吹き（大正期）」前掲『県立一中・首里高校90年のあゆみ 沖縄の教育風土記』所収、149頁。

40) 同書、147頁。

41) 呉屋良幸「私の黄金時代」前掲『養秀百年』所収、279頁。

部隊を指揮したことがある」<sup>41)</sup>。4年生、5年生といえ、佐喜眞はすでにウタさんと結婚している。運動会には、おそらく養父母共々、ウタさんも、徹夜で持えた重箱をもって、佐喜眞の応援に駆けつけたことであろう。しかし、佐喜眞が運動会の花形スターであったとは、とうてい思えない。というのも、当時を振り返る回想記には、スポーツの花形選手や運動会の様子もしばしば登場するが、その場面で佐喜眞興英の名前が出てくることはない。

1912(明治45)年3月、沖縄本島にも衆議院議員選挙法が施行され、その結果、同年4月15日、高嶺朝教、岸本賀昌が当選した。佐喜眞興英が5年生になった直後である。

1894(明治27)年5月、沖縄県尋常中学校が、京都や奈良を巡る修学旅行を実施したのが、沖縄最初の本土修学旅行であった、といわれている<sup>42)</sup>。その後、1897(明治30)年3月、九州への修学旅行。翌1898(明治31)年3月にも九州への修学旅行を実施している。1899(明治32)年3月、「五年生東京旅行。以後例年行事となる」<sup>43)</sup>。

佐喜眞と同期の呉屋が「五年に進級した四月に行われた本土への一ヶ月にわたる修学大旅行も楽しかった」と述べている<sup>44)</sup>。あるいは、佐喜眞もこの修学旅行に参加したのであろうか。

島袋光裕は「東京は中学五年のとき修学旅行できたことがある」と、自叙伝に記している<sup>45)</sup>。彼は、後でも触れるように、一中を卒業後、京都の剣道場の門を叩き、二ヶ月程後に、東京へ向かった。東京で彼は「修学旅行で知り合になった神田三崎町の玉名館に下宿した。主人は熊本の人で長女が荒木繁子、次女が荒木郁子といって、青鞥社同人平塚雷鳥と共に活躍した女傑」であった、という<sup>46)</sup>。そこへ佐喜眞は電報を打ち、島袋に迎えを頼んでいる。その回想記の文面から推測すると、おそらく佐喜眞も受験までは、そこに投宿していたと思われる。もし、佐喜眞が中学5

---

42) 島袋哲「進む皇民化教育」前掲『県立一中・首里高校90年のあゆみ 沖縄の教育風土記』所収、123頁参照。

43) 「学校のあゆみ年表」前掲『養秀百年』所収、571頁。

44) 呉屋良幸「私の黄金時代」前掲『養秀百年』所収、279頁。

45) 島袋光裕、前掲『石扇回想録』、30頁。

46) 島袋光裕「『女人政治考』の佐喜眞興英君」前掲『養秀 創立八十周年記念』所収、113頁。



年の修学旅行に参加していたとすれば、東京での当初の下宿先は、彼にとってまったく見知らぬ先でもなかったのかもしれない。

## 六

先にも紹介した宮里栄輝の回想記には、次のような記述がある。「入学の時の最上級5年生（大正2年、第25期卒）の印象が特に強い。5年甲組の級長佐喜眞興英氏は、私の入学式の日、偶然その下宿屋で話題に出たその人であった。学芸会の席で英語演説を試みていたが、沖縄の歴史上有名な護佐丸の中城城での討死のことがその内容であったと思う。中学時代からつとに氏が郷土の歴史に関心を持っていたことが伺える」<sup>47)</sup>。

護佐丸といえば、尚巴志、尚忠、尚思達、尚金福、尚泰久と5代の国王に仕え、護佐丸・阿麻和利の乱（1458年）で自刃した15世紀の英雄である。その護佐丸の討死に関する英語演説を、佐喜眞は、彼の中学時代の最終学年である1912年度に全校生徒の前でおこなったのであった。それからおよそ90年の後、2001（平成13）年2月3日、4日の両日にわたって北中城小学校体育館で、村民劇「護佐丸の星」が上演された（原作；南原あい、演出；幸喜良秀、主催；北中城村文化協会）。かつて、護佐丸が城主であった中城城跡が、その前年2000（平成12）年11月30日に「琉球王国のグスク及び関連遺産群」のひとつとして、世界文化遺産へ登録されることが決まった。もちろん以前から登録への動きはあったわけで、その祝賀記念公演へ向けの「事業計画書」は、次のように記している。「北中城村文化協会では、世界遺産に登録される中城城跡と護佐丸の物語がもっと深く村民に愛され、誇りとなって地域興しの活力源に成るようにとの願いを込めて、新しい護佐丸像の芝居を創るための戯曲募集をいたしました。この企画は県内外からの関心も高く、短期間の内に実に32篇もの戯曲が集まり、多くの力作の中から南原あいさんの『護佐丸の星』が大賞に輝きました」。ちなみに、公募作品に対しては三次にわたる審査がおこなわれた。2000年6月4日に開かれた最終選考の審査委員は、北島角子、嶋津与志、大城立裕、幸喜良秀の4氏であった。

---

47) 宮里栄輝「追憶断片」前掲『養秀百年』所収、297頁。

北中城村は、佐喜眞興英の一粒種貞子さん縁の地で、実際また、貞子さんの長男も現在そこに住んでいる。彼も戯曲公募に応じた。が、最終選考に洩れた。その先輩がシナリオを考案中、時折、護佐丸の壮絶な死に様をどう描こうか、そのロマンの転結の聞き役をしていただいただけに残念であったが仕方がない。それよりも、護佐丸をめぐつてのその因果に、なにか思うところがあった。

そのような地域住民を取り込んだ劇といえば、また、宜野湾市教育委員会主催の創作市民劇『新城村と佐喜眞興英』（作：仲村元惟、構成・演出：小沢公平）も想起される<sup>48)</sup>。この劇は、2000年3月5日宜野湾市民会館で上演された。原作者の仲村は長年佐喜眞興英を研究しておられ、先にも掲げた彼の諸論稿は、佐喜眞の幼少時代や中学時代を知るうえでも貴重である。この演劇は、当時の新城村の生活風土と佐喜眞の生涯を主題にしているので、特に彼の中学時代にスポットをあてて演じられたというわけではない。が、中学校の卒業式の情景も一幕出てくる。

第一幕 第三景 県立第一中学校正門前 大正2年3月

——木立に囲まれた校舎の一部が見える。校門には『沖縄県立第一中学校』と記され、校門の横には『第25回卒業証書授与式』と書かれた看板が立っている。

ナレーション；かくて歳月は流れて大正2年、佐喜眞興英19歳の春を迎えた。県立一中在学時代に、幼なじみで両親の許嫁であった新城ウターと結婚していた興英は、学問への理想と結婚というはざまに立たされ、前途に明暗を分かつ分岐点に立った。しかし、彼の向学の意志はなお強く、英語、ドイツ語への道はもとより、恩師清水駿太郎との出会いにより民俗学へと発展したのである。そして、大正2年3月21日、県立第一中学校第25回卒業式を迎えた。

---

48) 宜野湾市教育委員会では、「佐喜眞興英一生誕百年記念事業報告書一」（1994年）を編集発行している。1993年には、佐喜眞興英の生誕百年ということで様々な催しがあった。たとえば「生誕100周年記念 郷土の偉人 佐喜眞興英展」（宜野湾市教育委員会主催）が市役所ロビーで開催された。また、同年12月18日には、宜野湾市中央公民館でシンポジウム「佐喜眞興英の世界」（主催：沖国大南島文化研究所、宜野湾市教育委員会、沖縄タイムス社）が行われた。

このナレーションの後、校門の前での、興英の実母カマと新妻ウタさんとの会話があって、次のような台詞のやりとりが続く。

河野：おいロバ（興英のあだ名）、さすが君は秀才、特待生だよ。今日の卒業生総代の答辞を読むのを聞いて感動したよ。

下地：俺もだよ、「蛍の光」のオルガンの旋律の中で、君が答辞を読むと涙がこぼれたよ・・・（校門を振り返り）いよいよこの学校ともお別れか・・・

河野：うん、この校舎とも、そして良き友達ともお別れだなあ・・・みなそれぞれの道へ旅立つというわけだ。ところでロバ、君はこれからどうするんだ？

興英：俺か？俺は一高に進み、目指すは東京帝国大学だ。

下地：そして将来は裁判官だとさ、裁かれるのは君かも知らんぞ。河野。

河野：おいおい冗談はよせよ、下地。ところで東京は誰を頼って行くつもりだ？

興英：島袋光裕だ。

下地：おい、島袋はたしか早稲田大学だよな。

興英：着のみ着のままで乗り込んでびっくりさせようかと思っているんだ。

河野：はははは・・・、普段真面目な興英が、そんなことでもしたら面白いだろうな。

下地：なにはともあれ、お互いは、ここまで友情を温めてきたのに、これで別れるのは、一寸寂しいな。

しかし、この「島袋はたしか早稲田大学だよな」という下地の台詞は疑問である。

島袋光裕は、大正2年、一中を卒業すると、北辰一刀流の師範内藤高治の門を叩くため、京都へ出発した。その後に東京へ向かったのである。島袋光裕が早稲田大学を受験し入学したのは、一中を卒業した1年後の大正3年である。自叙伝で彼は「母には『東京で勉強するから』と言いふくめて、内藤師範の門をたたいたが、剣道の世界は、想像を絶するほどに厳しく、毎日が血をはくほどの苦しさであった。二ヶ月はまたたく間に終わってしまったが、とうとうたまりかねて、私は夜逃げ同様

---

49) 島袋光裕、前掲『石扇回想録』、29頁。

に無断で道場をとび出した。大正二年の初夏で、京の道には、まだつゆが残り、狭く立ちならぶ軒には冷氣が含まれていた。夜が白々と明けるころから早や小鳥が鳴いているのが、何となく悲しかった<sup>49)</sup>と語っている。しばしば引用される島袋光裕の養秀同窓会記念誌に載った思い出の記で、彼は「私は卒業して間もなく東京に出た」と書いている<sup>50)</sup>。が、それを上記の自伝の記述と重ね合わせると、内藤師範の道場を飛び出したのが、大正2年の初夏で、その後に東京に出向いた。そして、東京にいる島袋のところへ佐喜眞は「何時新橋着、ムカエ」という電報を打ったわけである。当時の高等学校の入学試験は7月に行われていた。結局、初夏以降且つ一高入試日以前に、佐喜眞は東京に向かったことになる。なお、島袋が早稲田に入学したのは大正3年であるが、その思い出の記のなかで、島袋が、佐喜眞が一高に入学したのも「大正3年である」と記されているのは明らかに誤記である<sup>51)</sup>。

ちなみに、「裁かれるのは君かも知らんぞ。河野。」「おいおい冗談はよせよ、下地。」という台詞は、冗談ではなく実現された。ただ、組み合わせが違っただけである。下地玄信はそれこそ起伏に富む生涯を送った人物であるが、その子供向けの書『育英の父 下地玄信』に興味深い記述がみられる。彼は、とある選挙違反の廉で捕まり、罰金20円の判決を受けるが、その時の裁判官が、一中時代の同級生当間重剛であった<sup>52)</sup>。後に、下地は当間に佐喜眞の墓の所在を尋ねている。創立80周年記念事業の一環として養秀同窓会が発行した記念誌に下地はこう記している。「昨年沖縄に行った時、せめて佐喜眞君の墓参りをしたいと思って其当時の主席であり同期生である当間君にも相談したがどうしても分らないのでアノ附近を通った時、車の中から遙拝して冥福を祈った」<sup>53)</sup>。現在、佐喜眞興英が眠っている亀甲墓の向かいには、孫の佐喜眞道夫によって私設の佐喜眞美術館が建てられている。

---

50) 島袋光裕『『女人政治考』の佐喜眞興英君』前掲『養秀 創立八十周年記念』所収、113頁。

51) 同書、114頁。

52) 亀川正東『育英の父 下地玄信』(下地玄信氏顕彰期成会、1973年)、53頁参照。

53) 下地玄信「佐喜眞興英君の思い出」前掲『養秀 創立八十周年記念』所収、115、116頁。

## 七

佐喜眞興が卒業した大正 2 年の卒業式の光景を新聞記事から覗いてみる。

「〔琉球新報；大正 2 年 3 月 21 日〕昨日午前十時第一中学校の第二五回卒業証書授与式を全校講堂に於て挙行せり来賓には日比知事，和田警察部長，島内学務課長，五味事務官補，渡嘉敷県視学，松田判事，知花首里区長，秦高女校長，樺山商校長，切通那覇区視学，横内属，亀井水産校長，長友之善，太田朝敷，上野助役等及生徒父兄四十名にして最初に山口校長の勅語奉読次で清水教諭の成績報告次で卒業生の証書授与次で山口校長の式辞次で日比知事の告辞，来賓として熊本憲兵隊長少佐留田利輝氏の祝辞次で福島重信の生徒総代祝詞引続き佐喜眞興英の卒業生徒総代答辞にて式は了り閉会を告げたるが当日清水教諭の報告せし成績は左の如くにして昨年度よりは頗ふる好成績なりと

### 一，卒業生員数

創立当時より昨年迄の卒業生徒数	八一四
本年度の卒業生徒数	七一
計	八八五

### 一，入学当初の在籍員数と卒業生との比例

四十一年度入学生徒数	一三二
同年度入学にて本年卒業のもの	四七

### 一，本年卒業生の昨年との比較

	本年度	昨年度
四十一年入学	四七	三八
一回以上原級	二二	一四
中途より入学	二	二
計	七一	五四

### 一，本年卒業生の出身郡区別

那覇三〇，首里二三，中頭七，島尻五，国頭二，宮古二，八重山二，計七一

### 一，本年卒業生の志望別

高等学校五、高等商業校八、高等工業校三、医専門校二、海軍兵学校二、陸軍士官学校二、商船学校一、高等師範学校二、早稲田大学予科一、東亜同文書院一、台湾国語学校二、養蚕講習所一、師範校二部二六、実業従事者九、南米渡航者一、未定五、計七一

猶ほ卒業生の姓名は左の如し

佐喜眞興英、下地玄信、河野国広、呉屋良幸、伊波興徳、仲宗根源和、平敷安亮、玉那覇眞牛、呉屋芳春、具志堅政賢、當間重剛（以下、略）

○第一中校優等者賞品授与 第一中学校の卒業生中優等者として賞品を授与されたるものは佐喜眞興英、下地玄信、河野國廣、呉屋良幸の四名にして就れも故事成語大辞典を授与されたる由因に記す午後一時より卒業生の謝恩会を催ふせり」

この新聞記事で「本年卒業生の志望別」とあるのは、たとえば、当時、高等学校の入試は卒業した年の7月に行われており、中学を卒業した時点で入学が決まっているわけではないからであろう。ただし、少なくとも、高等師範学校は中学在学中に入学許可がおりていたようである<sup>54)</sup>。

また、3ヶ月後には「〔琉球新報；大正2年6月26日〕本年度県立第一中学卒業生下地玄信今般東亜同文書院県費留学生に選抜せられたり」という記事が新聞に掲載された<sup>55)</sup>。

ここで、宮里栄輝の回想記を借りて、この25期卒業生たちを紹介する。「佐喜眞氏の同期生には下地玄信、河野國廣、呉屋良幸ら秀才が輩出した。この期は、まさに一中の黄金時代ともいうべきではなかったろうか。下地氏は卒業後東亜同文書院に進学、首席で卒業の彼が同校在学中、沖縄の新聞に投稿した『われは琉球人たるを恥ぢず』という論文は沖縄の青年学徒のため万丈の気を吐いていた。河野氏は五高を経て東大経済科に進み、優秀な成績で卒業を飾り、呉屋氏は広島高師、東大を卒へ、七高の教授となった。第二十五期卒の先輩には以上の秀才組のほか、島袋光裕氏のような異色の人材もいた。同氏は剣道の名選手として前後二回も京都の武徳会における全国武道大会に出場した。半面、演劇面にも趣味を持ち、卒業後は早大に

---

54) 呉屋良幸「私の黄金時代」前掲『養秀百年』所収、279頁参照。

55) 『沖縄県史 第18巻資料編8』（1966年）、669頁。

進んで斯道の研修に努め、芸能一筋の途を歩んで、今や郷土伝統芸能の最高指導者として活躍中である」<sup>56)</sup>。

## 八

『創立百十周年記念出版写真集 目で見える養秀百十年』（1990年）に収められている学友会誌「球陽」の表紙キャプションには、「県立第一中学校の学友会誌は1892年（明治25）『球陽』の名で創刊」された、という。そして、そこには「第二十号」（1911年）と「第拾六号」（明治四拾年九月五日発行）の「球陽」表紙が掲載されている<sup>57)</sup>。この「球陽」20号に、中学3年生の佐喜眞が、次頁以下のような作品（日本文、英文とも）を掲載している。なお、この中学時代の佐喜眞の作品2題は、琉球史料複刻頒布会が印刷発行した『佐喜眞興英全集』（複刻1970年1月10日）にも、また『女人政治考・霊の島々（佐喜眞興英全集）』（新泉社、1982年）にも収録されていない。ちなみに、佐喜眞の中学3年時代といえは、彼にとって、1910（明治43）年5月18日、新城ウタさんと結婚した記念すべき年でもあった。

〔この資料作成にあたっては、仲宗根將二（前平良市総合博物館館長）、高良倉吉（琉球大学教授）、中村功（北中城村平和文化課長）、仲地哲夫（本学南島文化研究所所長）諸氏のご教示をいただいた。ご厚情に対し、記して謝意を表したい。〕

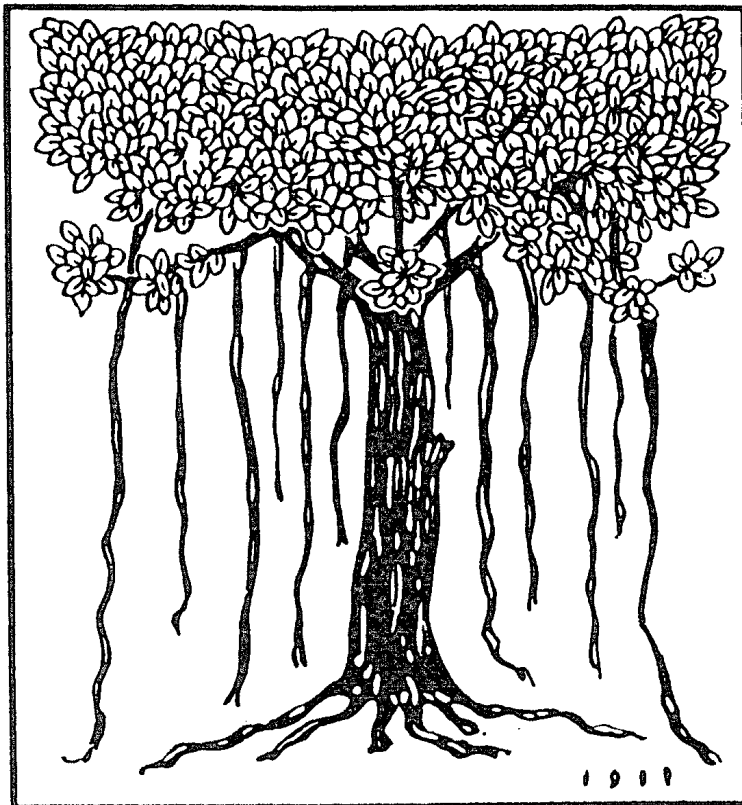
（2003年2月22日）

---

56) 宮里栄輝「追憶断片」前掲『養秀百年』所収、297頁。

57) 先にも触れたように、『養秀百年』に依れば、1894（明治27）年8月に「学友会が組織され、雑誌を発行する」となっている。

# 球陽



沖繩縣立第一中學校附屬會

第十二號

(1)「球陽」第二十号 表紙



## ○ことばを慎め

三、甲

佐喜眞 興 英

もの云へば唇寒し秋の風。

三寸の舌五尺の身を害ふ。

口はわざはひの門と。

右の俳句格言は何れもことばを慎まざるべからざる眞理を巧に道破し世人のよく喧傳するところなり。

實に言語は吾人の思想を発表するに缺くべからざるものなるは言を待たざれども其の言ふところ多きに過ぎ、或は人を欺きたる舉動をあらはし、或は虚言をいふが如き人をして不快の感を起さしめ、己の品格を失ふこと少からず、慎しまざるべからず。かの貝原益軒先生の江戸より筑前までの航海中に於ける傍若無人の言を語りし少年の後に大いに愧ぢたるが如き、これ言語をつゝしまざるがため然らしめたる好適例なり。

ことばを慎しめとは如何なることを云ふか？、曰く、第一に虚言を云ふこと勿れ、次に輕譟なること勿れ、卑劣なること勿れと。如何となれば若し人々の言ふところ虚言多しとせんか社會の秩序全くすたれて約束成り立つことなく、事業發達せざるのみならず退歩に退歩して殆んど想像する能はざる境遇に陥らん、故に重ねて言ふ敢て虚言を話すべからずと。

人又輕譟なる言を語りたらば他人に迷惑をかくること多く、言卑しければ人にいやしまる。實に言語を慎しむと否とは人の人格に大いなる影響を及ぼすものなれば大いに慎しまざるべからざるは勿論なり。

The Sham Fight in Honor of Marquis Shos Heir.

3. A. No. 38. K. Sakima.

On the last day of April of this year, a great farewell meeting was held at Onoyama Park in honor of Marquis sho's Heir, who was going to England, and then the middle schools of Shuri and Naha had a sham fight on the field near the park.

The day was very fine,—— perhaps by God's mercy I suppose

We students of the First Middle School, arming ourselves, started from Shuri at noon very bravely to the stirring notes of the bugle and arrived at the Naha Drimary School at one.

A pleasant halt was made in the shady play-ground. At two all the students of the several middle schools were assembled together and formed into a battalion. After a short powerful speech of Captain Misu, the Commander of the Battalion, the Second Company, commanded by Lieutenant Omija and to which I belonged, was given the general scheme, which was as follows;——

"The enemy which attempts to attack Naha, is now staying at mensa. The Second Company shall attack the enemy's right wing to help the main body which shall attack the left. The enemy have put on caps with havelocks."

At about half past two, we left the school. Crossing the North Meiji Bridge, we hid ourselves among the small bushes and watched the enemys movement. It was not long before we began to fire a volley upon the enemy.

What followed was so pleasant and so gallant that I can hardly describe it. The sound of thousands of guns deafened us with its echoes.

"March in haste! March! March!" We moved at the commanders bidding just as his hands did at his will. Crossing the South Meiji Bridge, we ran some distance forward, and lay down in a form and fired bullet after bullet till we used them up.

When the battle had lasted for about an hour, we ran up to the enemys position, crying out loudly, "Yari yari! yari!" —— loud enough to destroy the earth.

Hearing this, the enemy ran away, and we had a great victory!